

2012年(平成24年)4月26日(木) 日刊

月ごめ読料1050円(税込) 昭和52年11月28日 第3報復讐録可

慶良間で何が起きたのか①

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

はじめに、2011年1月31日頃は琉球新報を憲法の表現の自由違反と著作権侵害で訴えた。その内容は慶良間の「集団自決」の真相を伝えようとする一作家を封殺して弾圧する新聞社の横暴ぶりを告発するものだった。これだけでも前代未聞の大事件だが、沖縄の新聞社もテレビも黙殺を続けてきた。そんなわけでぼくの戦いを知る沖縄の人々はほとんどいなかった。そんな中で八重山日報が去年一月と三月に江崎孝さんの「上原正稔の挑戦」を掲載し、そのニュースはあつという間にインターネットを通して全国に広がった。琉球新報も沖縄タイムスも自分たちの都合の悪いニュースは一切黙殺を続けている。しかし、今、八重山日報に続いて、五月十日には「うらそえ文藝」が江崎孝さんの八重山日報の「上原正稔の挑戦」論考の補綴版を発表する運びになった。

読者もよくご存じのように教科書問題では八重山日報は徹り高ぶった沖縄タイムスと琉球新報に対し、敢然と「真実の報道」を続け、見事に勝利したと言ってもよい。真実は多数決で決まるものではないことを証明したのだ。ぼくの敗えるほどじゃない。友人らはぼくのことを「勇気がある」と評するが、それは勇気ではない。人のために尽くす、自分のために尽くすな、とぼくの算数するロジャー・ビノー先生から教えられた。その言葉を守っているだけだ。「集団自決」の問題は実は「自分自身のため」に反している。琉球新報と沖縄タイムスに対する「人間の尊厳を懸けた戦い」なのだ。それをこれから伝えよう。

2006年初頭、ぼくは琉球新報の編集長から沖縄戦の長期連載を依頼された。何年でも自由に続けてくれ、ということだった。それだけぼくを信頼してくれていたのだ。第一弾としてその年の四月から年末まで「戦争を生き残った者の記録」147回を発表し、好評を博したと言ってもよい。何の問題も起きなかった。第二弾の「バンドラの箱を開ける時」が2007年5月末から始まり、その冒頭でぼくは次のように予告した。

「第二話 慶良間で何が起きたのかは今、世間の注目を浴びている。集団自決についてアメリカ兵の目撃者や事件の主人公たちの知られざる証言を基に事件の核心を突くものになるだろう。」だが、第二話が発表されることはなかった。ぼくの物語はその後、四月月間中断した。一体何があったのか。ぼくの連載の担当者と交わっていたM記者には多くの原資料と一週間の原稿を渡していた。その時、Mはこれもおもしろそうだな、と嬉しそうに言った。そして翌日東京することになっていると話した(東京で何があったのか、誰に会ったのか、そのうち明らかにするだろう)。六月十五日(金)のことだった。ところが、六月十八日の月曜日Mから新報社に連絡が来ると、連絡が入った。新報社に書くこと、Mはヤケに威張った調子で、ぼくを編集部の上の階の空室部屋へ連れ出した。そこには顔見知りの編集記者三人が難しげ顔をしてぼくを待っていた。Mはいきなり言った。「第二話は載せないことにした。」「何だ」とどういうことだ。「ぼくは怒鳴った。記者の一人が「新報の編集方針に反するからだ。」と冷やかに言った。別の記者は「君

は何年か前に同じ記事を載せているじゃないか。重複は許さぬ。」ぼくは言った。「それは君らの産物だ。僕は第一話の伊江島戦でも日本側とアメリカ側の両方の資料を使っている。その一つは既に新報で発表している。沖縄戦ショウダウンを使っただぞ。第二話も「沖縄戦ショウダウン」や多くの資料を使って4、50回の長編にして赤松、梅澤の名譽を回復するものにするつもりだったのだ。その資料はMにも渡している。彼は喜んでくれた。だが、四人組はでんもんのはでんの一息強りで前に進まない。ぼくは言った。「君たちにはぼくの連載にストップをかける権利があるのか。表現の自由の権利を侵しているんだぞ。ぼくは記者会見でこれを発表する。」「一人の記者(現編集局長)があわてて「記者会見はやめてくれ」と言った。話は決裂した。

こうして6月19日から始まることになっていた「慶良間で何が起きたのか」が発表されることはなかった。翌日から予告を破って期待していた読者から新報に抗議や問い合わせが殺到し、新報社内は騒然となった。プロゾで毎日のように「バンドラの箱」を追っていた江崎孝さんもそんな読者の一人だった。一般の読者は気づかなかつたが、彼は「宮城封鎖」が起きていることをいち早く悟っていた。そのことは「上原正稔の挑戦」で詳しく述べられている。産経新聞の小川さんも同様だ。二人とも報道に関わっているから敏感なのだ。

実はこの時期2007年6月は琉球新報と沖縄タイムスが「集団自決には命令があった」とする大キャンペーンの真っ最中があったことを忘れてはならない。3月31日政府が「教科書から集団自決の軍命削除」の記事が新聞、タイムス同新聞で大々的に報道され、大キャンペーンが始まっていたのだ。新報とタイムスはオビニオンリーダーとしてその社説や社会面、文化面で各市町村に働きかけ、8月までには全市町村が「集団自決には軍命あり」の決議が出されていたという異様な状況だった。しかもその議決文がほとんど同じ文面を並べている始末だった。

「バンドラの箱」が中断し、読者からの抗議や問い合わせが殺到しても琉球新報が上原正稔の筆を折っても固く構えていた理由もそこにある。中断から四ヵ月後、Mが連載担当から除かれ、連載を再開することにし、読者には申し訳ないが「慶良間で何が起きたのか」は掲載すことになった。(つづく)

2022年(平成34年)4月27日(金) 刊

月ざめ購読料1050円(税込) 昭和52年11月28日 第3種郵便物認可

八重山

慶良間で何が起きたのか②

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

二〇〇八年八月上旬、170四に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだが、ぼくは、いよいよ来たか、と思っ

た。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあつさり言った。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」そして

「人間の尊厳を懸けた戦い」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと罵る。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を見出し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一束の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した時、森の奥で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、希望の光が残されているのだろうか。

二〇〇八年八月上旬、170四に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだが、ぼくは、いよいよ来たか、と思っ

た。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあつさり言った。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」そして

「人間の尊厳を懸けた戦い」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと罵る。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を見出し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一束の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した時、森の奥で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、希望の光が残されているのだろうか。

二〇〇八年八月上旬、170四に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだが、ぼくは、いよいよ来たか、と思っ

た。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあつさり言った。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」そして

「人間の尊厳を懸けた戦い」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと罵る。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を見出し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一束の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した時、森の奥で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、希望の光が残されているのだろうか。

二〇〇八年八月上旬、170四に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだが、ぼくは、いよいよ来たか、と思っ

た。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあつさり言った。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」そして

「人間の尊厳を懸けた戦い」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと罵る。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を見出し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一束の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した時、森の奥で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、希望の光が残されているのだろうか。

二〇〇八年八月上旬、170四に達した頃、ぼくの連載を担当している記者が「編集部の方からバンドラの連載をそろそろ終わってほしいかと言ってきた」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだが、ぼくは、いよいよ来たか、と思っ

た。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあつさり言った。新報社内のギスギスした雰囲気はうんざりしたからだ。そこで、「最終章」そして

「人間の尊厳を懸けた戦い」として物語を書き、読者に伝えてきた。だから、反戦作家ではない。それどころか、僕は戦争の物語から「人間とは何か、そして自分とは何か」知ろうとしてきた。そして人間について多くのことを学んだ。

人はよく戦争とは醜いものだと罵る。だが、僕は最も醜いはずの戦争の中に最も美しい人間の物語を見出し、それを読者に紹介してきた。暗黒の世界に一束の光が差し込むと、その希望の光は真夏の太陽よりも眩しいものだ。米須精一、グレン・ネルソン、グレン・スローターの三人組が洞窟に隠れている住民数千人を救出した時、森の奥で玉城朝子さんとい美しい女性が数千人の住民と兵士を説得し、投降させた話など例を挙げればキリがない。僕は数々の戦争の物語を伝えてきたが、まだ伝えていない大切な物語がある。それは慶良間の「集団自決」の話だ。そこには誰も語らない、語れない物語がある。そこには、希望の光が残されているのだろうか。

慶良間で何が起きたのか③

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

―神もおののく集団自殺―
僕は一九八五年、タイムス紙上でアメリカ第10軍のG2情報部のG2サマリを中心にした「沖縄戦日記」を連載し、その中でニューヨーク・タイムズの報道する渡嘉敷住民の「集団自殺」を発表した。その要旨に次のようなものだった。

神もおののく集団自殺―三月二十九日発。昨夜我々第77師団の隊員は、渡嘉敷の険しい山道を島の北端まで登りつめ、一晩そこで野営することにした。その時、一マイルほど離れた山道から恐ろしいうめき声が聞こえてきた。手榴弾が七、八発爆発した。偵察に出ようとする仲間の中から狙い撃ちにされ、仲間兵士が一人射殺され、一人は傷を負った。我々は朝まで待つことにした。その間、人間とは思えない声と手榴弾の爆発が続いた。ようやく朝方になり、小川に近い狭い谷間に入った。何と云うことだろう。そこは死者と死を急ぐ者たちの修羅場だった。この世で目にし

た最も痛ましい光景だった。ただ聞こえてくるのは瀕死の子供たちの泣き声だけだった。そこには二百人ほどの人がいた。(注：第77師団G2リポートは二百五十人と記録している。) そのうちおよそ百五十人が死亡、死亡者の中に六人の日本兵(※)がいた。死体は三つの小山の上に束になって転がっていた。およそ四十人は手榴弾で死んだと思われる。周囲には不発弾が散乱していた。木の根元には、首を絞められ死んでいる一家族が毛布に包まれ転がっていた。母親だとと思われる三十五歳ほどの女性は、紐の端を木にくくりつけ、一方の端を自分の首に巻き、前かがみになって死んでいた。自分で自分の首を絞めることは全く信じられない。小さな少年が後頭部をV字裂にざっくりと割れたまま歩いて

た。軍医は助かる見込みのない者にモルヒネを注射し、痛みを和らげてやった。全部で七十人の生存者がいたが、みんな負傷していた。生き残った人々は

アメリカ兵から食事を施されたり、医療救護を受けたりすると、驚きの目で感謝を示し、何度も頭を下げた。「奥米英の手にかかるとより自らの死を選べ」とする日本の思想が間違っていたことに今、気づいたのだろう。自殺行為を指揮した指導者への怒りが生まれた。数人の生存者が一緒に食事をしているところに生き残りの日本兵(※)が割り込んできた時、彼らは日本兵に向かって激しい罵声を浴びせ、取りかかろうとしたので、アメリカ兵が保護してやった。なんとも哀れだったのは、自分の子供たちを殺し、自らは生き残った父母らである。彼らは後悔の念から、泣き崩れた。

以上が一九四五年四月二日のニューヨーク・タイムズが報じた渡嘉敷住民の集団自殺の要旨だ。だが、僕はこの記事を発表した時点で気付かなかったが、※印を附した日本兵とは実は防衛隊員であったことを知ったのは一九九五年春と夏に渡嘉敷島に

た。アメリカ兵には日本兵と防衛隊員の区別がつかなかったのだ。その前年の一九九四年、僕は戦後五十周年に沖縄を訪れるアメリカ人遺族関係者を迎えるため「おきなわブラス50市民の会」を組織し、その活動の中でデューダーベンポートさんから渡嘉敷の「集団自殺」を目撃したグレン・シアレス伍長の手記を入手した。それは衝撃的なものだった。一九九六年六月僕はそれを「沖縄戦シヨウダウ」と題して琉球新報紙上で発表した。その一部を次に紹介しよう。

―一九四五年四月二十七日夜明け、僕たちは渡嘉敷の最南端の浜に上陸し、山の小道を登る途中で三人の日本兵を射殺し、目的地に着くと信物弾を打ち上げ、味方の艦隊の砲撃が始まった。「山を下りて阿波連の村を確保せよ」との命令を受けた。その途中、小川に出くわした。川は干上がり、広さ十メートル、深さ三メートルほどの川底のくぼみに大勢の住民が群がっている。彼たちの姿を見るや、住民の中で手榴弾が爆発し、悲鳴と叫び声が谷間に響いた。想像を絶する惨劇が繰り広げられた。大人と子供、合わせて百人以上の住民が互いに殺し合い、ある

いは自殺した。僕たちに強姦され、虐殺されるものと狂信し、僕たちの姿を見たとなん、惨劇が始まったのだ。年配の男たちが小っちゃな少年と少女の喉を切っている。僕たちは「やめろ、やめろ、子供を殺すな」と大声で叫んだが、何の効果もない。僕たちはナイフを手に入れている大人たちを撃ち始めたが、逆効果だった。狂乱地獄となり、数十個の手榴弾が次々、爆発し、破片がビュンビュン飛んでくるのでこちらの身も危ない。全く手をつけられない。「勝手にしやがれ」とばかり、僕たちはやむなく退却し、事態が収まるのを待った。医療班がかつけ、全力を尽くして生き残った者を手当てしたが、既に手遅れで、ほとんどが絶命した。

この阿波連のウフガ―上流の集団自殺については、いかなる沖縄戦の本にもなく、タイムスも新報も全く触れていない。だが、第三戦隊陣中日誌は記す。「三月二十九日―悪夢のごとき模様が白目眼前に晒された。昨夜より自決したる者約二百名(阿波連においても百数十名自決。後判明)」。グレン・シアレスさんの手記を真実に掲げている。(つづく)

2012年(平成24年)4月2日(日) 甲

月ぎめ購読料1050円(税込) 昭和52年11月28日 第3版郵便物誌可

八重山

慶良間で何が起きたのか④

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

現地調査で知った意外な事実
一九九五年夏、僕は渡嘉敷の金城武徳さんに案内され、島の最北端「北山(ニシヤマ)」に向かった。だが、金城さんは、ここは北山ではなくウアラヌフルモで第一玉碎場と呼ばれる」と説明した。僕は「鉄の暴風」で植え付けられた自分の思い込みに呆れたが、さらに驚いたことに、金城さんと大城良平さんは「赤松隊長は集団自決を命令していない。それどころか、村の人たちから感謝されている。」と言うのだ。そこで「鉄の暴風」で隊長の自決命令を伝えたと言われている比嘉(旧姓安里)喜順さんに会って事件を聞くと、「私は自決命令を伝えたくはない。赤松さんが自決命令を出したとする。『鉄の暴風』は嘘ばかりです。世間の誤解を解いて下さい。」と言う。知念朝暉さんに電話すると、「赤松さんは自決命令を出していない。私は副官として隊長の側について、隊長をよく知っている。尊敬している。嘘の報道をしている新聞や書物は読む気もしない。赤松さんが気の毒だ」と言う。これは全てを白紙に

戻して調査せねばならない、と決意した。渡嘉敷村史、沖繩県史など様々の証言を徹底的に検証した結果、次のような住民の動きが浮上した。「三月二十七日、村の防衛石兵衛は前夜から「敵が上陸して危険だから北山に移動せよ」と各地の避難場所を走り回った。渡嘉敷村の西側の避難場所北山には古波蔵村長ら村の有力者をはじめ数百人が集まった。(前年の村の人口は一四四七人であることに注意)そこで古波蔵村長、真喜屋前校長、徳平郵便局長ら村の有力者会議が開かれ、「玉碎のほかにない」と誓い、賛成し玉碎が決められた。一方、赴任したばかりの安里巡査は村民をどのように避難誘導しようかと考え、軍と相談しようと思ひ、赤松隊長に会いに行つた。安里巡査が赤松隊長に会うのはこれが最初だった。赤松隊長は「私達も今から陣地構築を始めるところだから、部隊の邪魔にならない場所を避難し、しばらくの情勢を見てはどうか」と助言した。安里巡査は古波蔵村長ら村の有力者にそのように報告した。ところが防衛隊員の中には既に妻子

を殺した者がいて、「このまま敵の手にかかるよりも敵(いさぎよ)く自分達の手で家族一緒に死んだ方がいい」と言い出して、先に述べたように村の有力者たちは集まって玉碎を決定しようということになった。防衛隊員も住民も既に平常心を失っていた。早まるな、という安里巡査に耳を傾ける者はいなかった。防衛隊員らは「赤松隊長の命令で、村民は食料、陣地裏側の北山に集まれ。そこで玉碎する」と決め附けた。住民は皆死ぬことに疑問はなかった。最北端のウアラヌフルモを埋め尽くした住民と防衛隊員は黙々と「その時」を待っていた。防衛隊員から手榴弾が手渡された。天皇陛下のために死ぬ、国のために死ぬのだ。砲弾を雨あられと降らしている恐ろしい鬼畜は今にもここにやってくるのだ。夕刻、古波蔵村長が立ち上がり、宮城陣地の儀式を始めた。村長は北に向かって「礼」、これから天皇陛下のため、御国のため、深く死のう」と演説し、「天皇陛下万歳」と叫んだ。皆もそれに続いて両手を挙げて斉唱した。村長は手本を見せよう

と、手榴弾のピンを外したが爆発しない。石に叩きつけても爆発しない。見かねた真喜屋校長が「それは私が機銃を見せよう」と手榴弾のピンを抜くと爆発し、その身体が吹き飛んだ。狂乱した住民は私も私も手榴弾のピンを抜いた。だが、不発弾が多く、爆発しないのが多い。「本部から機銃銃を借りて、皆を撃ち殺そう」と防衛隊員の誰かが言った。村長は「よし、そうしよう。みんなついてきなさい。」と先頭に立って、三百メートルほど南に橋梁中の部隊本部に向かった。住民はワァーと叫んで陣地になだれ込んだ。その時、アメリカ軍の砲弾が近くに落ち、住民はいよいよ大混乱に陥った。本部陣地では仰天した兵士らが「来るな、帰れ」と叫ぶ。「兵隊さん、殺して下さい。」と懇願する少女もいる。赤松隊長は防衛隊に命じ、事態を収めた。住民らはスコスコと二手に分かれて退散した。だが、午後八時過ぎ、ウアラヌフルモ(第一玉碎場)に戻った住民らは「神もおののく集団自決」を続行し、陣地東の谷間(第二玉碎場)に向かった金城武徳さんらは生き残った。そこで「玉碎」は終わった。三月二十八日午後八時過ぎから小雨の中敵弾激しく住民の叫び声阿

條原の如く陣地後方において自決し始めた。橋梁。(中略)三月二十九日、首を縛った者、手榴弾で一団となって爆死した者、棒で頭を打ち合った者、刃物で首を切断した者、戦いと云え、言葉に表し尽くしえない情景であった。」
一九九五年取材した元防衛隊員の大城良平さんは語った。「赤松隊長は、村の指導者が住民を殺すので、機銃銃を貸してくれ、と頼んできたが断った、と話してくれた。赤松隊長は少ない食料の半分を住民に分けてくれたのです。立派な方です。村の人で赤松さんのことを悪く言う者はいないでしょう。」
同じく比嘉喜順さんは語った。「赤松さんは人間の鑑(かがみ)です。渡嘉敷の住民のために泥をかぶり、一切、弁明することなく、この世を去ったのです。家族のためにも本筋のことを世間に知らせ下さい。」
僕はこの時点で「赤松さんは集団自決を命令していない」と確信した。だが、大きな疑が残った。なぜ、渡嘉敷の人たちは公(おおやけ)に「鉄の暴風」を非難し、赤松さんの汚名を責(す)す(ごう)としないのだろうか。その答えは突然やってきました。

(つづく)

2012年(平成24年)4月30日(日) 日刊

月ぎめ購読料1050円(税込) 昭和52年11月28日 第3種郵便物認可

八重山

慶良間で何が起きたのか⑤

人間の尊厳を懸けた戦い

上原正稔

バンドラの箱を開けた宮城晴美さん

一九九五年六月下旬、沖縄タイムスの文化欄に宮城晴美さんが「母の遺言―切り取られた『自決命令』」を発表した。凄まじい衝撃波が走った。座間味村女子青年団長であった晴美さんの母初枝さんは、戦後「家の光」誌で「住民は男女を問わず、軍の戦艦に協力し、老人、子供は村の忠魂碑前に集合して玉砕すべし」との命令が梅澤裕隊長から出された」と記していたが、その部分は誤だった、というのだ。「母はどうして座間味の『集団自決』が隊長命令だと書かねばならなかったのか」晴美さんは説明している。

一九四五年三月二十五日、その夜、初枝さんに「住民は忠魂碑の前に集まれ」と伝令の音が届いた。初枝さんはその伝令を含め、島の有力者四人と共に梅澤隊長に面会した。意味もわからぬまま、四人に従っていたのだ。有力者の一人が梅澤隊長に申し入れたことは、「最後

の時が来た。若者たちは軍に協力させ、老人と子供たちは軍の足手まといにならぬよう忠魂碑の前で玉砕させたい」というものだった。初枝さんは息も詰まらんばかりのショックを受けていた。隊長に「玉砕」の申し入れを断られた五人はそのまま引き返した。初枝さんを除いて四人はその後自決した。

梅澤さんはこの場面について大城将保さんへの手紙(一九八六年三月の沖縄資料館集所収)の中で次のように記している。「二十五日夜十時頃、戦艦に仕込まれていた本部へ村の幹部が来訪してきた。助役宮城盛秀氏、収入役宮平正次郎氏、校長玉塚政助氏、更直宮平恵壽氏および女子青年団長宮平(現宮城)初枝さんの五名。その用件は次の通りであった。一、いよいよ最後の時が来た。お別れの挨拶を申し上げます。二、老幼婦女はかねての決心の通り、軍の足手まといにならぬよう、また食料を残すため自決します。三、つきましては一思いに死ねるよう、村長一同忠魂碑

前に集合するから中で爆薬を破裂させて下さい。それが駄目なら手榴弾を下さい。役場に小銃が少しあるから実弾を下さい。私は愕然とした。私は答えた。一、決して自決するでない。軍は持久戦により持ちこたえる。村民も爆薬を持ち、食料を運んであるではないか。生き延びて下さい。共にがんばりましょう。二、弾薬は渡せない。しかし、彼らは三十分ほども動かず、懇願を続け、私はホトホト困った。折しも艦砲射撃が再開されたので、彼らは急いで帰って行った。」

晴美さんのコラムは梅澤さんの手記が正しかったことを裏付けたのだ。戦後、沖縄に接収法が適用されることになったが接収法は本来、軍人、軍属に適用されるもので、一般住民には適用されないものだ。そこで村当局は「隊長の命令で自決が行われており、亡くなった人々は戦争協力者として遺族に年金を支払うべきだ」と主張したと初枝さんは晴美さんに残した筆記で記していたのだ。

そうか、そうだったのか。僕の目の前で霧が晴れ、全てがはっきり見えてきた。厚生省は一般住民の戦死者でも戦艦に協力した者には「年金」を支給するという条件を出してきたため、座間味だけではなく、渡嘉敷でも「隊長命令により自決した」ことにせねばならなかったのだ。宮城晴美さんは正にバンドラの箱を開けてしまった。「母は関係者が存命しているうちは発表してはならないが、いつか必ず真相を発表してくれ」と晴美さんに遺言していたが、晴美さんは母の遺言に背いて新聞で発表した。「母の遺したものと」という本を出版し、時の人となったが、村の関係者から「余計なことをした」ととさんさん叱られる羽目になり、本を書き換えた。裁判に出れば涙ながらの証言をしたり、バンドラのうにひどい目に遭っているように、バンドラの箱から飛び出したものが元に戻らないように、彼女が告白した衝撃の真実を交わらない。バンドラの箱からこの世の全ての悪徳が飛び出した。宮城晴美さんは真実の扉を開けた。バンドラの箱には希望が残ったが、晴美さんの箱には知りたくない真実が残った。だが、少なくとも僕の目の前の霧を払ってくれた。心から感謝している。

二〇〇六年一月、産経新聞は琉球政府で接収業務に携わった照屋昇雄さんに取材し、「遺族たちに戦没遺族接収法を適用するため、軍による命令ということにし、自分たちで書類を作った。当時、軍命令とする住民は一人もいなかった」との証言を得た。照屋さんは「嘘をつき通してきたが、もう真実を話さなければならぬ」と思った。赤松隊長の悪口を書かれるたびに、心が張り裂かれる思いだった。「と涙ながらに語った。ところが、沖縄タイムスは「照屋氏は一九五七年には接収業務に勤務していないという証拠がある」と産経新聞の「誤報」を報じたが、後日、照屋さんは大切に保管していた一九五四年の「任命書」を提出し、この問題は結着したが、タイムスがこの失態を報ずることはなかった。タイムスも新報も重要証人の照屋昇雄さんに一切取材していない。

梅澤さんは前記の手記の終りに記している。「座間味島の軍命令による集団自決の通説は村当局が厚生省に対する接収申請のため作製した『座間味戦記』および宮城初枝氏の『血ぬられた座間味島』の手記が蘭脱の根源となつている。初枝さんが梅澤さんに「本當にごめんさい」と謝った時、梅澤さんは感激したとのことだ。(以下)

二〇〇六年一月、産経新聞は琉球政府で接収業務に携わった照屋昇雄さんに取材し、「遺族たちに戦没遺族接収法を適用するため、軍による命令ということにし、自分たちで書類を作った。当時、軍命令とする住民は一人もいなかった」との証言を得た。照屋さんは「嘘をつき通してきたが、もう真実を話さなければならぬ」と思った。赤松隊長の悪口を書かれるたびに、心が張り裂かれる思いだった。「と涙ながらに語った。ところが、沖縄タイムスは「照屋氏は一九五七年には接収業務に勤務していないという証拠がある」と産経新聞の「誤報」を報じたが、後日、照屋さんは大切に保管していた一九五四年の「任命書」を提出し、この問題は結着したが、タイムスがこの失態を報ずることはなかった。タイムスも新報も重要証人の照屋昇雄さんに一切取材していない。

梅澤さんは前記の手記の終りに記している。「座間味島の軍命令による集団自決の通説は村当局が厚生省に対する接収申請のため作製した『座間味戦記』および宮城初枝氏の『血ぬられた座間味島』の手記が蘭脱の根源となつている。初枝さんが梅澤さんに「本當にごめんさい」と謝った時、梅澤さんは感激したとのことだ。(以下)

慶良間で何が起きたのか⑥

人間の尊厳を懸けた戦い―

上原正稔

赤松さんは一九七〇年三月二十六日、渡嘉敷村長に招かれ合同慰霊祭に参加する目的で那覇空港に着いた時、抗議団の怒号の嵐の出迎えを受けた。「何しにノコノコ出てきたんだ」「人殺しを神壇に入れるな」「赤松捕れ」のシュプレヒコールが浴びせられた。赤松さんは結局、渡嘉敷に上陸することはかなわなかった。神壇で殺人鬼と罵罵され、故郷に戻るも、事件を知った娘から「お父ちゃん、なんで神壇の人たちを自決に追いやってたのか」と責められた。赤松さんは「娘にまで罵られるのは、何としても辛い」と記している。記者は赤松さんの人格について知らないものと思う。赤松さんの「ひととなり」を伝える一通の手紙を僕は一九九五年比嘉(旧佐安島)喜屋壁さんから預かった。それをここで紹介しよう。

一九七〇年四月二日付の赤松さんからの比嘉さんへの手紙は次のように綴られている。(前略)今度の渡神についてはずっと心配が行かす。あなたか一人相撲を取ったようでお怒りな致しまして(中略)村の戦史については軍事補償その他の関係からあの通りになつたと推察致し、できるだけ触れなくなつたのです。あの様な結果になり、人々から神壇のようにとられたこと

と存じます。しかしマスコミも一部不審を抱いているように感じられましたので、いつか正しい歴史と私たちの尊厳が通じること信じております。四月十七日付の手紙は次のように伝えている。(前略)安原さんにはあのような俗世の流布されている中、ただ御一人で耐え忍び、ご心中のほどご察し申しあげております。(中略)先日、元琉球新報の記者より手記を書いてくれ、と言われ、聞いたところによりますと、現在マスコミの半分ほどは赤松さんを信じていると申されておりましたが、一度世に出し、これはど流布されてからは頼しいだろうから知友会などを取材して解たに真実のものを出したらどうかと書いておきました。いづれにしても、私たちは真相が明白にされ、私たちの汚名が拭い去られる日を期待し、努力しております。一日も早く神壇の人々にも理解していただき、私たちと島民が心を合わせて共に戦つたように、次の世代の人々が憎しみ合うことなく本土の人々と仲よくやってゆけることを祈つてやみません。喜屋壁さんも機会をつくって、ぜひ本土に来てください。皆、歓迎してくれませんか。また子供さんの御座につきましても私たちが

ご利用下さい。いくらかでも戦時中のご恩返しできれば幸甚です。島津はご遺族のことですが、その後いかがですか。すでに神壇は静いと思えますので御自愛の一のほどお祈り致します。敬具 赤松次郎

これが慶良間の「鎮西自決」(無田自決)という言葉は伊佐良博記者の創作であると、本人が記しているの真相だ。だが、神壇タイムスの「鎮西自決」は今も発行され続け、次のように伝えている。一島津自決の自決のとき、島の駐在連(安原喜屋壁さん)のことも一掃したが、彼は「自分は住民の無縁を見とどけて、軍に報告してから死ぬ」と言つて遂に自決しなかった。一赤松大尉は「軍として最後の一兵まで戦いたい。まず非敵国島をいさぎよく自決させ、われわれ軍人は全ての高橋を確保して、持久戦をせよとのえ、敵と一戦を交えねばならぬ。事実はこの島に住むすべての人間に死を強求している」ということを主張した。(中略)薩摩味の歌、原長梅少佐は米軍上陸の前日、忠告無効の立場に住民を案じ、玉砕を命じた。住民が広場に集まつてきたその時、近くに艦隊が停泊したので、みな遠くを見てしまったが、村長はじめ後場軍官とその家族は各自の場で

で坐席を置いて自決した。日本軍は最後まで山中の陣地にこもり、遂に全員投降。原長梅少佐のごときは、のちに朝鮮人型安原らしきもの二人と不明死を遂げた。この記述には真実の一カケラもないことは誰の目にも明らかだろう。正に「見てきたような嘘」でしかない。ノール軍作家の大江健三郎はこの「鎮西自決」の記述をそのまま信じ、「神壇ノート」で旧軍指揮官を糾弾したので、人は誰であれ、三の目の高さでしか物を見ることのできない。だから、信じていこうとを信じて、自分に都合のよいことを信じてしまふのだ。だが、慶良間の「鎮西自決」について、赤松次郎さんと梅澤裕さんが命じたことはないことははっきりしている。

人間の尊厳を取り戻す時僕は一九九六年六月琉球新報の「神壇戦ショウダウン」の中で言明したが、もう一度ここで述べよう。一神壇の新聞、特に神壇タイムスの責任は限りなく重い。そして一人の人間をスケープゴート(生贖)にして、「無田自決」の責任をその人に負わせてきた神壇の人々の責任は限りなく重い。僕は長い間、赤松さんと梅澤さんは「無田自決」を命令したとの先入観を拭い去ることができなかった。真実が明らかになつた今、赤松さん、梅澤さん、そしてご家族の皆様さん本島にご免なさいと謝罪しよう。そして今、僕は一つ脱皮して一つ大人になることができた。

2011年10月中旬、ぼくは兵隊風を助け、赤松次郎さんの弟秀一さんに迎えられ、一緒に喜次さんのお墓参りをした。ぼくには神も仏も無い存在だったが、長年の葛藤を下ろし、何だか心が軽くなった。だが、大きな問題が創られている。自分の親、子、兄弟を殺して渡嘉敷平金を受け取っていることは誰も語りたくない。誰れもないのだ。僕は知罪人でもなく、文化人でもなく、宗教家でもなく、道徳家でもない。だが、僕は知っている。自分が愛する家族に手をかけた者はいつまでも忘れず、心を痛めているのだ。だが、それを軍隊のせいにして、他人のせいにしてはならない。ましてや、無実の軍人のせいにしてはならない。自分のこととしてとらえない限り、心が癒されることはないのだ。そして、赤松さんと梅澤さんとそのご家族にきちんと謝ることだ。誰も彼らを集める筈はない。真実、薩摩味で母親に首を切られたという青年は「母親を恨んでいるか」との質問に「そんなことはありません。母を心から愛しています」ときっぱり答えた。赤松さんも梅澤さんも心の広い人間だ。きつと許してくれるはずだ。いや、きつと、ありがたうと言つてくれるだろう。それが人間の尊厳を取り戻すということだ。僕はそう信じている。(おわり)